

沿岸域の総合的管理に向けた行政、市民、研究者の連携プロジェクト



沿岸海洋・防災研究部

沿岸海洋新技術研究官
(博士(工学))

古川 恵太

(キーワード) 自然再生、市民参加、マハゼ

1. 沿岸域の総合的管理

沿岸域の総合的管理 (ICM: Integrated Coastal Management) は、持続的な開発を実現するため、1992年のリオサミットで採択されたアジェンダ21にその必要性が記述され、我が国においても、第5次全国総合開発計画 (1998年、閣議決定) や沿岸域の総合的管理計画策定のための指針 (2000年、国土庁) での記載を経て、2007年に施行された海洋基本法に位置付けられている。

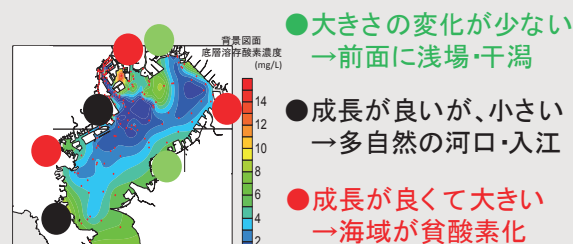
ICMを実践することで、場や事業の広がり配慮し、多様な関係者の参画を前提としたオーダーメイドの環境保全・再生が可能となると考え、国総研では沿岸域の生態系保全手法としてICMの様々なメニューを試行している。

2. マハゼの棲み処さがしプロジェクト

ICMにおいて、多くの関係者が理解できるわかりやすい行動の目標が必要である。そこで、東京湾の典型的な釣り魚であり、近年その数の減少が懸念されているマハゼに着目した調査を実施した。

調査は2012年の7月から9月に実施された。専用の調査シートと、マハゼ計測用の定規を作成し、FAXにて報告を受け付けた。当初より、釣りジャーナリストの会のご協力により、釣り新聞・雑誌などに調査の概要や参加募集が掲載され、釣り人を中心に延べ240名に参加いただき、約140地点、約8000匹のデータが収集された (<http://www.meic.go.jp/edohaze>)。

この結果、この時期の平均釣果が1人1時間あたり20匹程度であること、平均全長が7月に9 cm、8月に10 cm、9月に12 cmであることなどが明らかになるとともに、東京湾再生のシンボルとしてマハゼを取り上げることの有効性も示唆され、第13回東京湾シンポジウムで発表されるとともに、釣り雑誌などに掲載された (図: <http://www.meic.go.jp/>)。



小さい個体が定着できる河口・入江が有効
貧酸素化しない海域 (浅場・干潟) が必要

図 マハゼの棲み処調査のまとめ

3. 都市型干潟の楽しい使い方研究チーム

分野や所属を越えた市民としての活動の活性化も、ICMを推進する重要な要素のひとつである。

潮入りの池を持つ都市型の臨海公園 (高島水際線公園) において、一般市民参加型の生き物の棲み処探し調査が行われた (<http://www.meic.go.jp/wiseflat>)。これは、潮入りの池の干潟部でゴカイ掘り調査を行い、そのゴカイを餌に潮だまり部で、エビ釣り、ハゼ釣り調査を体験するものであった¹。

こうした取り組みを通して、海辺の自然体験への潜在的な欲求の高さを感じる。これらをICMの推進力としていきたい。

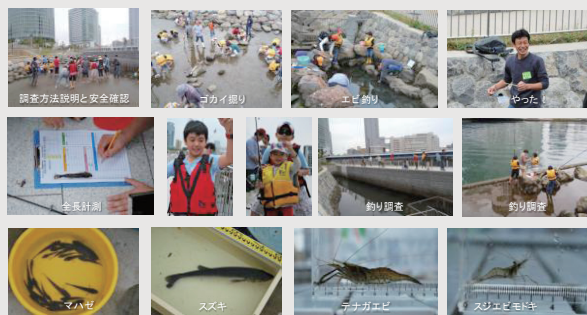


写真 生き物の棲み処探し調査

¹本調査は、海辺つくり研究会、ハマの海を想う会、東京湾シーバスプロジェクトなどをはじめとするNPO団体、地域住民、横浜市環境創造局、横浜みなとみらい21、神奈川県水産技術センター、国総研など多くの関係者の協働により実現した。